聖マリアンナ医大新聞

聖マリアンナ医科大学・新聞編集委員会　〒216-8511 川崎市宮前区菅生2-16-1　☎044-977-8111（代）総務課
http://www.marianna-u.ac.jp

主な内容

新年のごあいさつ　春夏秋冬（第 1 面）
新春によせて（第 2 面）
前田賞 / 第 84 回医学会学術集会（第 3 面）
研究者紹介④ / ダイバーシティ・キャリア支援センター　他（第 4 面）
令和 5 年度 聖医祭・オープンキャンパス　他（第 5 面）
教室・施設紹介 / エッセイの森　他（第 6 面）
在学生紹介 -3- / 解剖ご遺体追悼ミサ　他（第 7 面）
第 66 回東日本医科学生総合体育大会（第 8・9 面）
寄付金（第 10 面）
勤務犬モリス引退式 / 附属病院・施設だより（第 11 面）
創立 50 周年記念事業（第 12 面）

謹賀新年

2024
St.Marianna University
School of Medicine

パンデミックを越えて

理事長　明石　勝也

新年明けましておめでとうございます。教職員、学生、関係各位すべての方々に幸多い年であることを心からお祈り申し上げます。

新型コロナウイルスによるパンデミックもほぼ終息と呼べる状況になりました。長い歴史からみると僅かな3年間かもしれませんが、医療も教育も経済も、あらゆる事柄が大混乱に陥るのには十分すぎる時間だったと言えるでしょう。

しかしながらパンデミックから解放されて、素晴らしい日常が戻ると期待したにもかかわらず、世界ではウクライナやパレスチナで多くの命が奪われる紛争が勃発し、国際秩序や平和の崩壊への不安が募ってしまう状況にあります。

わが国も国際対応に追われ、経済も回復基調にはまだまだ遠く、学術・研究もデジタル化も世界から遠ざかっているように思えてなりません。長引くデフレも円安と相まって、インバウンド景気に沸くことにも違和感があります。

新しい資本主義がどのような展開をするのかまだ実感がありませんが、少なくとも目覚ましい経済成長を期待することは難しいでしょう。これからも続く人口減少と少子高齢化は医療・教育の世界にも拡大成長から縮小均衡へと舵を切り変える時が訪れたように思えます。

本年3月の東横病院閉鎖は大学財務状況の改善に止む無く決定したことではありますが、我々の持てるマンパワーも含めたすべての力を大学病院、西部病院、多摩病院、ブレストセンターをはじめ法人全体に集約し、いかなる環境下でも社会並びに地域に貢献できる聖マリアンナ医科大学を目指して発展していきましょう。

鯉の滝登り

学　長　北川　博昭

新年明けましておめでとうございます。皆様方におかれましては良き新春をお迎えのことと、お喜び申し上げます。さて、コロナ禍により行動制限を伴っていた3年が過ぎ、昨年5月から新型コロナウイルス感染症が5類感染症となり、早いものでもう8ヶ月が過ぎました。円安も後押ししているようですが海外からの旅行者がここ数ヶ月で急増し、観光地では外国人を見ることが多くなりました。また、アジアからの旅行者の多くはスーツケースいっぱいのお土産を持って空港の待合室で出国手続きを待っています。日本製品の実力だと思いますがMade in Japanは壊れないとの評判で信頼があります。医療においても日本の医療は信頼があり、治療費が高額であっても、海外から日本で正確な診断や治療を受けたい医療ツーリズムも盛んになってきました。

さて、昨年はうさぎ年でうさぎの跳ねる姿から飛躍・跳躍、向上の年と言われました。本学は新病院開院で2年間に延長された臨床実習を最新設備の整った病院で実施し、飛躍的に臨床実習の質をあげることが出来ました。今年の干支は辰年です。この言葉には「鯉はやがて竜になる」と言う意味がこめられています。その起源は古代中国にあり、「急流の滝を登り切る鯉は、登竜門をくぐり、天まで昇って龍になる」という登竜門の故事が元になっています。穏やかな流れの川に棲む鯉は急流を遡る泳力はないと思われても竜門を登り切ったのは、無数にいる魚の中で鯉だけでした。先日の新聞に急激な少子高齢化の中で令和5年度の私立大学・短期大学等入学志願者動向は半数以上が定員割れで大学再編不可避の議論が掲載されていました。本学は鯉の滝登りのように穏やかな流れの中で密かに天まで昇れる時期を目指して待っている状況です。昨年からうさぎで跳ねて、今年は業績を回復させ鯉の滝登りのように新病院を大きく発展させることが出来る年になると思います。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

建学の精神

キリスト教的人類愛に根ざした「生命の尊厳」を基調とする医師としての使命感を自覚し、
人類社会に奉仕し得る人間の育成、ならびに専門的研究の成果を人類の福祉に活かしていく医師の養成

本学の使命

生命の尊厳に基づき人類愛にあふれた医療人の養成

春夏秋冬

「医師の働き方改革」と「外科医不足」

いよいよ、2024 年の 4 月から「医師の働き方改革」が始まります。医師の健康確保と長時間労働の改善を目的に時間外労働の上限制限や連続勤務時間の制限が法改正されます。

これまで、我が国の医療現場は、“患者さんのために尽くす”医師の自己犠牲による長時間労働によって支えられてきました。われわれ外科医は、長時間の手術や術後管理に時間を要するため、労働環境においてただ単に業務時間を短縮するだけの改革では医療の質の低下を招くことが懸念されます。そのため、働き方改革に向けて医師の業務分担を目的としたタスクシフト／シェアが急務となります。労働環境を見直し整備することが、ひいては医療安全の確保や質の高い医療の提供につながることになるのです。安全で質の高い医療の提供を目指す「働き方改革」は、個々の意識改革なくしてなり得ません。

一方で、「外科医不足」も深刻な問題です。その最大の要因としてやはり過重労働と長時間労働が考えられます。したがって、働き方改革のシステム構築によって、若手医師や女性医師にとって魅力的な環境を整えることが何よりも肝要です。

私が外科医を目指したきっかけのひとつは、子供の頃に愛読していた漫画ブラック・ジャックでした。ブラック・ジャックの手術に対する姿勢には、医者の使命感と責任感がよく表れています。来年からの働き方改革により、ブラック・ジャックのような使命感と責任感を持って患者を助ける医師たちが、より良い労働環境で活躍できるような体制を整え、さらには外科医不足の改善につなげていくことが、日本の医療の未来をより良い方向へ導くことになると私は信じています。

消化器・一般外科学
教授　民上真也

新春によせて

新年のご挨拶

医学部長　**加藤　智啓**
生化学　主任教授

明けましておめでとうございます。

昨年の５月には新型コロナウイルス感染症も５類分類となり、一応の収束をみております。この感染症の医療や経済をはじめ社会に与えた打撃は大きく、未だコロナ前に戻っているとは言い難い面があります。コロナ以外にも、一昨年２月に勃発したロシアのウクライナ侵攻（ウクライナ戦争）は、収束する兆しのないまま、丸２年になろうとしていますし、昨年９月のハマスによるイスラエルへの奇襲攻撃をきっかけにしたガザ地区での戦闘は激化しており、本稿を書いている時点でも収束の目途が立っていません。日々多くの人命が失われ、あるいは人が傷ついていることには心を痛めるばかりです。また、このような情勢に伴い、燃料や食材、その他の生活必需品の価格高騰があり、医療機関も含め日本の社会にも大きな影響を与えています。一日も早く平和が訪れ、社会が安定することを願っております。

本学医学部では昨年４月から講義を原則対面に戻し、しっかりと良医を育てることに注力し、コロナ前を超える実績が上げられるように努力してきました。第１学年の「早期体験実習」では、人間の一生を支える社会の医療システムを学ぶという観点から、マタニティークリニック、幼稚園、地域医療機関、高齢者介護施設を順次訪れ実習します。コロナ禍で中断・縮小もありましたが、コロナ前に近い水準で行うことができています。本学学生を受入れてくださっている施設の方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。第４学年では昨年秋には、知識を問う「CBT」および実技を問う「OSCE」からなる共用試験が行われました。共用試験はこの時から公的化され、「CBT」および「OSCE」のそれぞれを統括する機関から派遣された監督者・評価者と共に厳正に行われ、全国医学部で統一された基準で合否が判定されるようになるなど、準国家試験としての役割が明確にされています。これに伴い、合格者に与えられていた「スチューデントドクター（SD）」という名称も「臨床実習生（医学）」という名称に変更されております。「臨床実習生（医学）」に認定された学生は、新年１月から診療参加型臨床実習を開始します。臨床実習生（医学）には、医療現場で医療スタッフの一員として医学・医療を学ぶことが求められ、これには教員の熱心な指導と現場職員の理解が必要です。また、学外医療施設等にも多大なご協力をいただいており、ご協力くださっている方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。なお、今後、臨床実習後に行われるOSCE（Post clinical clerkship OSCE）も公的化されることが予定されており、これに対しても万全の準備をして参りたいと考えています。

そのほか、教育体制充実のため、昨年度より、30分野以上の医学教科書をオンラインで閲覧や検索することが可能な電子教科書システム「iSmart」を導入し、全学生が個人ですべてを購入しなくても医学教科書に速やかにアクセスできる環境を整備しました。学生が医学知識を得るための利便性の向上により、成果の向上につながることを期待しています。また、課外活動においても、東日本医科学生総合体育大会が開催されるなど回復しつつある状況です。コロナ前の水準に戻ることを目指し、活動を盛り上げてまいります。学生同士の交流が深まることで信頼しあう仲間が増えていくと期待しています。

学生諸君には「自ら学ぶ」あるいは「自分を育てる」姿勢の重要さを十分に認識してもらうとともに、教職員はじめ周囲の方々には、「自ら学ぶ」あるいは「自分を育てる」学生のご支援を切にお願いする次第です。平和な世界が戻ることを信じ、本学学生の学問成就と本学の発展のため努力してまいりますので、今年も何卒よろしくお願いいたします。

Reboot、そして飛躍の年に

大学院医学研究科長　**遊道　和雄**
大学院　難治性疾患病態制御学　大学院教授

明けましておめでとうございます。平素より、大学院医学研究科の運営・教育にご尽力、御高配をたまわり、誠に有り難うございます。本年も倍旧の御指導御鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。聖マリアンナ医科大学・大学院は、医学教育・診療・研究活動の向上を目標に、主体的かつ積極的に社会還元ならびに医学・医療の発展に向けて邁進しております。

わたくしどもの大学に限らず、日本中の医育・医療機関は約４年におよぶ新型コロナウイルス感染拡大への対応に多くの力を割いてまいりました。本学の大学院教育についても、多くの方々のご尽力に支えられ、大学院学生、研究生ならびに指導教授・指導准教授の方々のご負担を少しでも軽減するよう努めてきました。ご協力に、あらためて厚く御礼を申し上げます。

本学は開学50周年を越え、令和５年１月には大学病院新入院棟も稼働を開始し、教職員の諸先輩がたのたゆまぬ御努力、御尽力のお陰様をもちまして、本学はいま、医学・医療の領域で大輪の花を咲かすことができたと存じます。これからの50年に向けて、令和６年は教育・診療・研究の３本柱、そして人材育成を含めた全てについてreboot・再始動を行い、三位一体となった活動を基盤として、これまでにない全く新しい治療法や医療技術が生み出し、社会に大きな発展をもたらすことが期待されています。このためには、本学の有する臨床力、臨床実績、研究成果、知的財産、設備・施設、そして人的資産である学部生・大学院生・全教職員の活動といった全てのリソースを結集するとともに、産官学連携を組織的に推進して、皆様と共に進んで参りたいと存じます。

新年のご挨拶

大学病院長　**大坪　毅人**
消化器・一般外科学　主任教授

新年明けましておめでとうございます。新病院に移転後１年が経過しました。新病院では教職員からの様々なご意見を参考にして「選ばれる病院～人・社会・未来から～」をテーマとし、また「多様な高次機能を備え、人に優しく、働きやすく、社会の変化に柔軟に対応できる未来志向型病院」をビジョンとして建設されました。今年12月には病院別館の改修が終了し新外来棟とエントランス棟が完成し、来年１月から新外来棟での診療を開始する予定です。新医療情報システムであるBest Careについてもさまざまなbugに対してほぼ改修がおこなわれ、従来のいわゆる患者個人のオーダー・記録としての電子カルテから病院全体の医療情報として医療の質改善、意思決定にいよいよ繋げていけるものと思っております。

また、今年４月より医師の働き方改革が始まります。医師の勤務時間に大きな制限がかかることになりますが、これまで準備してきたことに加えて、限られた時間内でいかに効率よく働くかということが求められております。働き方改革の中で当院が特定機能病院として、また地域の中核病院として社会・地域から求められる医療を提供するためには従来の診療スタイルを変えることも必要ではないかと思います。病院の理念達成に向けて教職員力をあわせて取り組んでいきたいと思いますので、本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

新しい時代のウェルビーイング

看護専門学校　校長　**鈴木　昌子**

新年あけましておめでとうございます。いつも本校の教育にご理解とご協力を賜り心より感謝申し上げます。コロナ禍の様々な影響を受けつつも、新しい社会をどのように生き抜くか、また、50年にわたり、看護学生を育んできたこの学び舎に、この後どのような風を送り込んでいくか思案の時です。そこで新しい時代に求められる幸せ、ウェルビーイング「心と体と社会の良い状態」をキーワードとして未来を描いていきたいと思います。

現代は変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の時代であり、将来の予測が困難な時代と言われます。だからこそ今ウェルビーイングなのだと思います。日本的ウェルビーイングの目指す日常は独立性と協調性のバランスが取れた自己意識を求めると言われています。つまり自分を認め人と共に歩み幸せを共有することを大事にする協調的幸福を求めるということです。そのために欠くことができないのが人との関係であり、特に対話ができるということでだと思います。あるコラムの一説に、ソニーの創始者のひとり井深大氏が「人と接するとき一つだけ大切にしてきたこと、それは誰に対しても同じ態度で接するということです」とありました。人と対話する時大切なことは井深氏が伝えてくれているようで、その思いに共鳴しました。対話の先にある共創が未来を描くことになります。そこから得られるものが日本人の求めるウェルビーイングに結びついていくのだと思います。

看護学生の皆さんがウェルビーイングを保ちながら日々を過ごし、専門職としての未来を描いて行けるような看護学校でありたいと思います。皆様の変わらぬご支援を賜りますことをお願いし、新年のご挨拶とさせていただきます。

第 16 回 前田賞授賞式

2023 年度前田賞選考委員会において、本年も多数の応募者の中から受賞推薦者を 5 名選考し、その後、最終選考結果を 9 月 25 日（月）開催の常任役員会にて報告、明石勝也理事長の承認を得て、下記のとおり受賞者が決定いたしました。

11 月 1 日（水）午後 4 時から医学部 6 階大講堂において、理事長、常勤理事、選考委員、その他の職員が出席するなか、第 16 回（2023 年度）前田賞授賞式が行われました。

前田先生のご遺影を囲んで

島村 季央（しまむら としお）　（大学病院 超音波診療技術部）

Establishment of routine echocardiography during chemotherapy and promotion of clinical research
（邦題：化学療法心エコーの確立と臨床研究の推進）

この度は名誉ある前田賞を賜り、深く感謝申し上げます。

抗がん剤による心毒性の早期検出のために心臓超音波スクリーニング体制を腫瘍センターの方々と確立しました。本体制により化学療法心臓超音波検査数は増加し、抗がん剤治療の安全性向上、医師及び患者満足度向上に寄与したと考えています。

また、私は超高齢化社会に伴い増加している大動脈弁狭窄症（AS）の研究を行い、心臓超音波検査の多断面評価は予後不良である超重症 AS の検出率が有意に増加することがわかりました。本院の治療数増加にも寄与していると考えます。今後も日常業務や研究、院内の活動に邁進してまいります。

最後に、ご指導いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

髙山 卓（たかやま すぐる）　（腎臓・高血圧内科学）助教

Angiotensin II type 1a receptor deficiency alleviates muscle atrophy after denervation.
（邦題：アンジオテンシンⅡ受容体（AT1a）欠損は、除神経後の骨格筋萎縮を軽減する）

この度は栄誉ある前田賞を賜り誠に有難うございます。

超高齢化社会の我が国において、高齢者の社会的自立を支えることが重要であり、骨格筋量や質の低下（サルコペニア）を抑制し、身体機能を維持することが求められています。しかし、十分な運動量を確保できない高齢者が多く、運動に代わるサルコペニアを抑制させる方法が求められます。今回、高血圧、腎疾患、心疾患ですでに広く診療で標的とされているアンジオテンシンⅡ受容体活性を抑えることで、新たに骨格筋萎縮を抑制させるメカニズムを明らかにしました。研究成果は、骨格筋における新たなレニン－アンジオテンシン系の臓器保護効果、さらにはサルコペニア抑制といった高齢者が希望する医療の提供に貢献できる可能性があります。

最後に聖マリアンナ医科大学で内科専攻医 1 期生としてのキャリアが始まり、様々なチャンスを頂きました。ご指導下さりました多くの先生方にこの場を借りて深く御礼申し上げます。

戸塚 雄介（とつか ゆうすけ）　（西部病院　医療安全管理室）係長

「院内自殺防止対策マニュアルの作成」―患者安全推進ジャーナル「病院内の自殺対策のすすめ方」を参考に―

この度は大変名誉ある賞を賜り、光栄に存じます。

この活動の発端は昨年 2 月に発生した事象となっており、賞を賜ることに戸惑いを覚える気持ちもございました。しかし、この事象を転機に新たなマニュアルを作成するとともに、院内設備全般の総点検・整備を多くの方の協力の元で進めたのも事実です。ソフト・ハード面双方の整備に対する評価であると今は前向きに受け止めております。この場を借りて深く感謝申し上げます。

活動にあたり、大学病院医療安全管理室にもご助力をいただきました。また、活動内容は多摩病院医療安全管理室とも共有しております。

今後も法人全体を含む視点でより良い取り組みにつながるよう、尽力して参る所存です。

森川 慶（もりかわ けい）　（呼吸器内科学）講師

A Prospective Validation Study of Lung Cancer Gene Panel Testing Using Cytological Specimens.
（邦題：細胞検体を使用した肺がん遺伝子パネル検査の有用性に関する前向き検証試験）

この度は、名誉ある賞を頂きまして大変嬉しく存じます。関係各位の皆様方に心より御礼を申し上げます。昨今の癌の個別化医療に関連するテーマであり、肺がん遺伝子変異の一括検査を細胞検体で実施する手法を確立いたしました。より低侵襲で簡便な NGS（Next Generation Sequencing）検査が普及する可能性があり、2023 年 2 月からは保険診療として使用可能となっております。

一方で、細胞検体で遺伝子変異を測定することに対する懸念の声もまだ強く、さらなるエビデンスを発出していく必要性もあろうかと思います。当初は大変な逆風の中でしたが、本研究を熱心にサポート頂いた病理診断科の皆様、そして検体採取で多大な貢献をしてくれた気管支鏡検査の術者に恵まれ、当院でしか成し得なかった研究であると確信しております。その進捗をいつも見守って頂いた峯下教授以下スタッフの先生方にも心より御礼を申し上げます。新病院の内視鏡センターでさらに研究テーマを増やしていきたいと思います。

矢田 哲康（やだ てつやす）　（多摩病院 クリニカルエンジニア部）主任

①災害拠点病院の集中治療室における持続的腎代替療法に対応可能な臨床工学技士の対応体制に関する実態調査
②災害拠点病院 ICU で持続的腎代替療法に対応可能な臨床工学技士に関する実態調査～首都圏調査からの続報～

この度は栄誉ある前田賞を賜り、深く感謝申し上げます。

本研究は、全国の災害拠点病院 755 施設を対象とし圧挫症候群患者受入と集中治療室の対応能力に関する調査を実施しました。その結果、圧挫症候群患者受入に関して課題があることが明らかになりました。

首都直下地震などの大規模災害を対応する上でも、臨床工学技士の集中治療室における対応などが重要であると考えます。

引き続き、日本災害医学会クラッシュ症候群特別委員として、研究を継続し「防ぎ得た災害死」を無くし、一人でも多くの命を助けられるように努めてまいります。最後に、本研究に関しご指導いただきました冨永直人教授をはじめとする多くの方にこの場をお借りして深くお礼申し上げます。

第 84 回医学会学術集会の開催報告

学術集会委員会　委員長　鈴木真奈絵

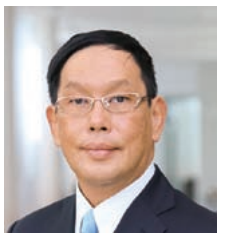
第 84 回医学会学術集会は、オンデマンド配信形式にて 2023 年 10 月 19 日から 11 月 16 日まで、4 週間開催致しました。

プログラムは、まず特別講演として「当院救命救急センターにおける新型コロナウィルス感染の経験」を藤谷茂樹主任教授（救急医学）にご講演いただき、指導教授就任講演として幸田和久指導教授（生体統合制御学）、教授就任記念講演として井上健男教授（呼吸器内科学）、森澤健一郎教授（救急医学）にご講演いただきました。さらに優秀学位論文賞（大学院）および最優秀論文賞（医大誌）を受賞された研究、そして学内研究助成金およびダイバーシティ助成金の研究成果についてご発表いただき、計 14 題の演題となりました。

今回は、動画配信による開催としては過去最高の参加者数および視聴数となり、大変盛会の内に終了致しました。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。皆様のご都合のよいお時間に視聴可能なオンデマンド配信形式をご支持いただいたものと思われます。一方で、コロナ渦も明けて対面開催を再開する学会も増えてきましたので、今後は対面開催と動画配信の両者のメリットを活かし、より充実した学術集会を目指したいと考えております。

研究者紹介❸

令和5年、最も印象的なひと言



難病治療研究センター　センター長　遊道 和雄

このたび、光栄にも本新聞の新年号「研究者紹介」の記事を書く機会をいただきました。そこで記事を書くにあたり、令和5年を振り返って、私は何をしてきただろうか、何か残せるものを得てきただろうかと愚考し始めました。ついでに、これまで何をしてきたのだろうか、大学卒後の道程を思い起こしメモ書きし始めました（ちょうど良い、これを記事にしようと）。

1990年に研究者のタマゴとして大学院に入学以来、はや三十年以上が経過しました。学位論文の研究テーマは「骨肉腫細胞の転移のメカニズム解明」でした。1986年Liottaらにより、癌細胞の転移は①癌細胞の基底膜への接着、②基底膜成分の分解・浸潤、③癌細胞の運動（遊走）の3段階によって遂行されるという“Three Step Theory”が提唱され、これに基づいて、当時整形外科医を志していた私は骨肉腫や軟部肉腫の転移のメカニズムの研究を始めたわけです。そこで得られた細胞接着分子（ラミニンとか）、増殖因子（EGFとか）、基質分解酵素（MMPsとか）の細胞生物学的特性を学びました。この“Three Step Theory”は、癌などの悪性腫瘍細胞ばかりでなく「炎症細胞の関節組織への浸潤」の理解にも繋がる、炎症による骨関節破壊のメカニズムも研究できるぞ！と、関節リウマチなど膠原病の勉強に鞍替えし、そして関節疾患としてリウマチと双璧をなす変形性関節症（OA）の病因・病態解明に少しでも近づきたいと、今も悪戦苦闘しております。

そして、最近は縁あって抗加齢・健康長寿（アンチエイジング・ウェルエイジング）の勉強も始めており、“浅いようで奥の深い酸化ストレス”や“ミトコンドリア機能・細胞エネルギー代謝”、さらに、“抗老化のための食や音楽・芸術の介入＆その効果”についても専門家のもとで学んでおります。

これまで行ってきた研究の中には、まだまだ詰めが甘く、これから発展させなくてはならないテーマ・プロジェクトも多くあります。一生のうちに、世の中のためになる画期的な成果を挙げることを夢にみつつ、皆様のこれまでのご厚情に感謝するとともに、ご指導ご鞭撻をたまわり、限られた時間と予算の中で効率よく研究を進めていきたいと思います。

最後に、私が今年最も印象深かった御言葉を記します。

私が心の師と仰ぐ甲府の御年八十うん歳（私より2回り上の同じ干支）の大先生がおっしゃいました、「僕もとうとう八十を超えたから、そろそろ（おっ！いよいよ引退宣言か？と身構える私を横目に、ひと呼吸おいて）、後進を育てようと思います」と…。生涯学徒・抗老化・健康長寿、万歳！令和6年が皆様の大願成就の年でありますように。

協定校ラオス健康科学大学とコンケン大学を訪問

学長　北川 博昭

〇ラオス健康科学大学（ラオス）を訪問

2023年5月1日（月）深夜便で羽田空港からバンコクに向けて出国し、約6時間半でスワナブーン空港に到着し、そこから乗り継いで午後12時40分にビエンチャン・ワッタイ国際空港に到着しました。

空港にはラオス健康科学大学（University of Health Sciences, UHS）Dr. Alongkhone副学長が休日にもかかわらず出迎えて下さいました。Alongkhone先生とは昨年日本WHO協会理事長の中村安秀先生、元大阪母子医療センター小児外科部長の窪田昭男先生、日本小児外科学会理事長の奥山宏臣先生と「小児外科国際シンポジウムin Lao PDR」に参加した際におめにかかり、その時にUHSを見学させていただいたことがきっかけで今回の提携に繋がりました。

到着翌日早朝からUHS学長のBounthime Samountry先生と本学の学生交流や教員の交流、研究が双方で行えるように、持参した合意書についての議論をおこないました。日本との医学交流にはハイテク機器も重要ですが、継続性を考えれば医学生の世代から交流を結ぶことが重要だという考えを話したところSamountry先生も同意してくださいました。

今後は、患者さんの栄養学や病理学等を含めた学問の交流を行い、将来の医師となる医学生から初期臨床、後期臨床研修医など若手の国際交流が重要だと考えております。

〇コンケン大学（タイ）を訪問

コンケン大学の医学部と本校は2019年10月から学生交流プログラムに関する協定を締結しました。コロナ禍では交流が一時中断されていましたが2023年より再開されました。

これまで本学教職員がコンケン大学へ訪問したことはなかったため、今回が初めての訪問となりました。

ラオスから陸路で現地へ向かい、初めに医学部長のApichat Jiravuttipong先生とお会いして、今後の医師の在り方、医学教育などについて議論しました。

コンケン大学の大学病院は50年の歴史があり、現在は別棟に病院機能の一部を移動しています。3年後には全てが新病院に移動する予定とのことです。院内や、学生がトレーニングをするためのシミュレーションラボを見学した後、本学学生が留学する際の状況や学生寮についても案内をしていただきました。

それから本学で実習をしていた現地の学生と昼食を楽しみ、午後からは大学の17学部を統括するCharnchai Panthongviriyakul学長を訪問しました。その対談の中で、『医学教育はますます細分化され専門性が高くなり、全身を診ることがとても重要だが、必ずしもハイテクの機器がそろっているわけではないので、診断力を付ける教育が重要だ』ということを再確認しました。

—ダイバーシティ・キャリア支援センター—

ダイバーシティ研究助成金、ダイバーシティ表彰（学術分野）について

ダイバーシティ・キャリア支援センター　事務局

2023年度の採択者・受賞者が決定しました。皆様の今後のご活躍をお祈りいたします。

2023年度　ダイバーシティ研究助成金 採択者一覧

氏名	所属	職位	研究課題名	助成金額
佐藤　利行	生化学（化学）	助教	顕微鏡的多発血管炎のバイオマーカー候補AC13の臨床検査法の確立	40万円
梅本久美子	臨床腫瘍学	講師	膵癌患者における腫瘍検体（組織、細胞診）と血液検体を用いたKRAS変異測定の臨床性能を評価する研究	30万円
チェン・サンディ	難病治療研究センター	助教	セレノネイン添加に伴う、凍結融解マウス卵子におけるミトコンドリアの酸化ストレス反応への影響を検証	30万円

2023年度　ダイバーシティ表彰（学術分野）受賞者一覧

氏名	所属	職位	掲載雑誌	論文表題
三浦　慎也	小児科学	講師	Journal of Intensive Care	Descriptive statistics and risk factor analysis of children with community-acquired septic shock
大橋　彩香	免疫学・病害動物学	助教	Frontiers in Microbiology	The plasma level of interleukin-1 β can be a biomarker of angiopathy in systemic chronic active Epstein-Barr virus infection
吉田　英樹	救急医学（集中治療）	助教	Antimicrobial Resistance and Infection Control	Use of broad-spectrum antimicrobials for more than 72 h and the detection of multidrug-resistant bacteria in Japanese intensive care units: a multicenter retrospective cohort study

Colors, Future!
いろいろって、未来。
川崎市
COLORS FUTURE! ACTIONS KAWASAKI 100th
聖マリアンナ医科大学
Green For All KAWASAKI 2024
学校法人 聖マリアンナ医科大学は、川崎市市制100周年記念事業と全国都市緑化かわさきフェアを応援しています。
かわさきSDGs ゴールドパートナー
川崎市は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

令和４年度　ベストティーチャー賞

教員表彰選考委員会　委員長　**池森 敦子**

本学では、医学教育の実践に顕著な成果を上げた教員の功績を称え、併せて全教員の教育意欲と能力向上を目指し、令和２年度より教員表彰制度を新設し、今年で３年目となりました。令和４年度のベストティーチャー賞は、講義部門で第１～４･６学年に配当された講義担当教員から各学年５名、実習部門で第１～４学年に配当された基礎系実習の担当講座から各学年１講座（分野）と、第5･6学年に配当された臨床系実習の指導教員８名が、医学部学生の投票により選出されました。令和５年６月21日（水）、医学部本館６階大講堂での主任教授会終了後に各部門の上位者を対象に表彰式が執り行われ、北川学長による表彰状授与についで各受賞者からは歓びの声とともに今後に向けた力強い抱負が語られました。

同表彰は引き続き実施して参りますので、教員の皆様には学生教育の更なる充実に向け、引き続きご尽力下さるようお願い申し上げます。

各部門受賞者・講座（受賞者は１・２位、講座は１位のみ掲載）

【講義部門】

第１学年	第１位 水嶋崇一郎（解剖学）	第２位 有戸　光美（生化学）
第２学年	第１位 水嶋崇一郎（解剖学）	第２位 水上　喜久（免疫学･病害動物学）
第３学年	第１位 足利　光平（スポーツ医学）	第２位 黄　　世捷（循環器内科学）
		〃　今井　光子（医学教育文化部門）
		〃　室井　良太（スポーツ医学）
第４学年	第１位 黄　世捷（循環器内科学）	第２位 本橋　隆子（予防医学）
第６学年	第１位 黄　世捷（循環器内科学）	第２位 伊佐早健司（脳神経内科学）

【基礎系実習部門】（いずれも第１位）

第１学年　解剖学（人体構造）	第２学年　解剖学（人体構造）
第３学年　解剖学（機能組織）	第４学年　解剖学（人体構造）

【臨床系実習部門】

第１位 黄　世捷（循環器内科学）　第２位　志茂　新（乳腺･内分泌外科学）

令和４年度　医学部成績優秀者顕彰および学業成績等優秀学生奨学金授与式

暑さ和らぐ雨空の下、９月８日(金)の昼休みに、顕彰および授与式が執り行われました。

多くの同級生や先輩、後輩、教職員に見守られる中、北川博昭学長、加藤智啓医学部長より賞状と副賞（図書カード１万円）が受賞者に授与されました。受賞者に対して、ギャラリーからは惜しみない賛辞が贈られました。

各選考については、成績優秀者は令和４年度学年末成績の結果に基づき各学年の成績上位者５名が選出され、また、１～４年次を通じて、特に成績が優秀であった第５学年の１名に、令和５年学業成績等優秀学生奨学金として100万円が給付されました。

次年度も、医学部生の更なる頑張りに期待しています。

教学部 学務課　斉藤祐誠

令和５年度聖医祭・オープンキャンパス

去る７月22日(土)から７月23日(日)にかけて、聖医祭・オープンキャンパスを開催いたしました。

本学の文化祭である聖医祭については、新型コロナウィルス感染症の影響により、令和２年から中止していましたが、３年ぶりに聖医祭をオープンキャンパスと同日に開催することが出来ました。聖医祭に関連したプログラムとしては、本学課外活動団体から、ダンス部の公演、管弦楽団によるコンサート、MESS（Medical English Speaking Society）による本学の国際交流の活動に関する展示が実施されました。この３年間、本学の課外活動については、新型コロナウイルスの影響により、大々的な活動の場が減少しておりましたが徐々に再開されてきました。今回の企画では、全体のごく一部ですが、彼らの日々の活動の成果を発表する良い機会となりました。この他に、勤務犬部門を創設し、本学附属大学病院において実施されている動物介在療法について、勤務犬委員会学生部による広報活動や、前勤務犬であるモリスとの触れ合いプログラムが実施されました。また、学生生活展示部門を設け、来場者が本学の学生生活をイメージしてもらえるよう、クラブ紹介動画の上映や将来の夢などの学生アンケート結果の展示、今年度から導入した電子教科書 iSmart をご紹介させていただきました。電子教科書 iSmart とは、㈱医学書院が提供する医学教育支援サービスであり、標準医学シリーズ一式をデバイス１つで閲覧できる製品となっています。本学医学部の学生であれば無料で利用することができ、多忙な医学生が、多教科の学習に臨むことができます。教材の持ち運びの負担を軽減し、学習の効率化により一層活用が期待できます。

オープンキャンパスについては、新型コロナウイルス感染症の影響により昨年度は午前・午後の入れ換え制とし、来場人数を各回100組（１組２名まで）に限定したうえでの開催でしたが、今年度は申込不要、入退場自由のコロナ禍前の体制に戻して２日間開催いたしました。７月22日(土)159組328人、７月23日(日)335組591人の計494組919人が来場しました。本学のオープンキャンパスは、学生主体によるオープンキャンパス実行委員会が中心となって企画・運営することが特徴であり、「施設案内」･「大学・入試説明会」の他、これまで修得した医学知識を受験生に伝える「医学体験コーナー（医療器具部門、東洋医学部門、乳がん検診部門、ドクターカー部門、超音波検査部門、解剖部門、感染症トリアージ部門）」や、本学の卒業生で、現在研修医の方が、自身が医学部を志した理由や学生生活、医師として働く現在の心境などについて講演する「卒業生講演」、本学教員による「模擬講義」が目玉企画でした。「模擬講義」では、昨年度学生が選ぶベストティーチャー賞を受賞したスポーツ医学 室井良太助教が講義をし、参加された多くの来場者に好評をいただきました。また、今回は初の試みとして、奨学金個別相談会ブースを設けました。今年度は、聖医祭と合同開催したことにより、平成30年度の897名を上回り、過去最多の受験生・保護者の方々に参加頂いたことで、本学の理念や魅力を十分に感じ取っていただけたのではないかと思っております。

入試の広報活動としてはオープンキャンパスの他に、学内進学相談会を開催しており、今年度は令和５年８月14日(月)、９月23日(土)の計２回開催し、こちらも多くの受験生に好評を得ております。

コロナ禍の影響により、これまで学生が培ってきたノウハウも風化する中、過密なカリキュラムの合間を縫って計画した学生の労を労うとともに、聖医祭・オープンキャンパスは、来場者の方々に直接、本学の特徴･魅力を理解していただく絶好の機会であり、来年度にも、より多くの方に参加していただけるよう、一層の充実を図っていきたいと考えております。関係者皆様におかれましては、今後ともご協力の程よろしくお願い申し上げます。

教学部 学務課　大里　満
教学部 入試課　藤原悠哉

小児外科学 講座

教室・施設紹介 28

どうなる？ 小児外科

小児外科学　主任教授　古田 繁行

小児外科という診療科は単独では成り立ちません。内科疾患や奇形を合併することから、小児科をはじめとする複数診療科との連携が必須のため、診療は大学病院やこども病院などに限られます。本学の小児外科は2施設で診療を行っています。昭和48年に第3外科学教室の一診療科区分として始まり、昭和56年には学会認定施設となり、その後昭和62年には横浜市西部病院が教育関連施設に加わりました。小児外科診療科としては全国でも老舗のひとつです。

2000年度の小児外科学会会員数は2995名でしたが、2023年度には1960名と減少の一途です。一方で専門医／指導医数は414/215名（2000年度）から772/287名（2022年度）へと右肩上がりで、それに伴い学会認定施設や教育関連施設も増加し、認定施設は全国201病院となり、十分に活躍の場が与えられています。ところが、昭和48年には210万人／年だった出生数が、現在は80万人／年を切りました。我々が扱う疾患は出生数に比例して発生するので、出生数の減少と小児外科専門施設の増加の構図は、一施設での臨床経験が限られることにつながります。

川崎市の出生数も平成28年から減少に転じました。なお、我々と診療圏が重なる周辺施設として、日本医科大学武蔵小杉病院と昭和大学横浜市北部病院が新たに加わり、全国でも屈指のハイボリュームセンターである東京都立小児総合医療センター（府中市）と国立成育医療研究センター（世田谷区）が比較的近所に移設されました。また本学の小児外科にはコンスタントに入局者がいるので、周辺施設と協力しつつ、1人でも多くの医師が長く小児外科を続けられるような環境作りを目指しています。

エッセイの森

対岸の火事にあらず

消化器内科学　講師　清川 博史

「胃癌や大腸癌は早期で発見されれば死なない病」。書店でこのように大きく見出しされている医学雑誌を目にする機会が増えた。胃癌や大腸癌は早期発見することが重要であることは言うまでもなく、発見するためのツールとしての内視鏡の役割は大きい。数年前に、胃がん検診内視鏡において22.2～25.5%の胃癌の見落としが報告されている（施設間差あり）ことを知り、背筋が凍る思いになった事を覚えている。現在、AIによる内視鏡の補助診断の開発や普及が検討されているものの、疾患の発見や診断については各内視鏡医の操作能力や肉眼診断能力に委ねられている。「握る内視鏡の重さは、検査を受けている人の命の重さだと思え」という研修時代に先輩に言われた言葉を胸に秘めながら、今日も内視鏡を握っている。

私の祖父は元消化器外科医であり、父は現役の消化器内科医である。家族の影響もあったのか、研修医だった頃の私は内視鏡の魅力に取り憑かれた。私は現在消化器内視鏡を用いて早期の消化管癌を発見・診断し、切除による治療を行っている。癌の治癒が得られた患者さんの笑顔を見ることは何よりの喜びであり、日々の診療の中で大きなやりがいを感じている。

そんな日常の中、昨年、友人が大腸癌で他界した。37歳だった。病気が発覚した時には癌は進行しており根治手術ができなかった、とのことだった。早期大腸癌を治療している自分にとっては、何より残念で無念だった。日本における大腸がん検診は「便潜血検査」が推奨されており、40歳以上を対象年齢としている。また、胃がん検診の対象年齢においては50歳以上とされている。若年者における胃癌や大腸癌の発見は有症状時に偶発的に発見されることが多いのが現状であり、発見時の進行例が多いことが報告されている。日常生活に多忙を極める若年者にとって、自らの健康への認識の低さ、検査への羞恥心なども検査の障壁となっているのだろう。供花の中の写真に映る友人に、若年者への検査を勧める啓蒙活動を行うことを誓った。若年者の胃癌や大腸癌は他人事ではなく、身近に存在している。この文章を見て、有症状時に早期に内視鏡を受ける気持ちになって頂けたら嬉しく思う。

先日、4歳になった息子が内視鏡を見て、目を輝かせながら「これ、なあに？」と尋ねてきた。自分が握る内視鏡が、息子に答えたように「人の命を守るモノ」となるよう、これからも尽力していきたい。

いわさきちひろの世界に触れて

神経精神科学　准教授　安藤 久美子

いわさきちひろさんのアートは、きっと誰もが一度は目にしたことがあるでしょう。その温かみと優しさのあふれる色彩で描かれた作品は、幅広い年代の多くの人たちから愛され続けてきました。聖マリアンナ医科大学病院の児童思春期ユニットには、そんないわさきちひろさんのアートが飾られています。

いわさきちひろさんのアートはとても不思議です。落ち込んだ気持ちの時にみるアートのなかの少女は、目を伏せ、なんとなく寂しそうに見えます。はずんだ気持ちの時にみるアートのなかの少女は、少し恥ずかしそうにうつむきながら、わたしたちと一緒に遊びたそうにしています。そう、アートはわたしたちのこころのなかを繊細に写し出しているのです。

近年は、アートの持つセラピー効果が広く認識されるようになり、さまざまな分野の福祉施設や医療機関でもすばらしい作品が展示されるようになりました。家族と離れ、入院治療に取り組んでいる子どもたちのこころに、ほっとするような優しいアートが今日も安心と癒やしを与えてくれています。

ちひろさんのアートと児童・思春期ユニットのスタッフ

聖マリアンナ医科大学病院は、公益財団法人いわさきちひろ記念事業団と提携し、
無償でアート作品を貸与していただいております。ここに改めて深く感謝申し上げます。

継　灯　式

継灯式の灯りの奥に

看護専門学校　1年B組
松川 巴南

4月に入学してからの半年間、私たちは、人の生命に直結する現場で一つの尺度で測ることのできない人の心に向き合う看護師になるため、座学にて基礎分野から専門分野までを広く深く学び、看護技術の演習や定期的に行われる学力テスト、課題などに懸命に取り組んできました。

10月20日(金)に執り行われた継灯式では、理事長や看護部長、日々お世話になっている看護学校の先生など、たくさんの方々からお祝いの言葉をいただき、看護に対する思いをさらに強く持つことができました。6月の病院実習は、新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン実習でした。そのため、患者さんや病院の方々との繋がりを感じる機会が少なかった私たちでしたが、継灯式は、人の命に常に向き合う聖マリアンナ医科大学の医療従事者の一員であることを自覚するかけがえのない時間となりました。そして、ナイチンゲールから受け継いだ灯は、まるで人の生命を表現しているかのように温かく、儚くもあり力強いものでした。私たちは、今後の学習や実習に協力して下さるすべての方々への感謝の気持ちを忘れず、患者さんの命の光を守り、患者さん一人ひとりの心が輝きを放てるような看護とは何かを追求していきたいと思います。

◆連載◆

在学生紹介 —3— 医学部学生インタビュー

宮崎放送のアナウンサーとして働いたのち、本学へ入学した小島拓さん。
アナウンサー時代の経験や、そこから医師を目指したきっかけなどを伺いました。

医学部４年生　小島 拓さん

—アナウンサーを目指したきっかけを教えてください。
小島君　高校受験の際、ずっと目標にしていた第一志望に入れず、高校に行くのが嫌になってしまったんです。それがちょうど2002年のサッカー日韓ワールドカップの時で、高校でも中継が放送されていたんですよね。中学の頃サッカーをやっていたこともあり、中継を夢中で見ていました。その時初めて実況アナウンサーというものを意識したんです。実況というものが、競技に一つ花を添えるというか、人の心を動かすものなんだと思い、それがきっかけでアナウンサーを目指しました。

—その後はアナウンサーを目指して勉強していたのですか？
小島君　高校を卒業して大学の理工学部に入学し、アナウンス研究会に所属しました。高校時代は気恥ずかしさもあり、なかなか周囲に「アナウンサーを目指している」とは言えなかったので、自分なりに活動してみようと思ったのはそこからです。
ただ、学部生時代はアナウンサー試験には受からず、大学院に進み経営工学を学びました。就職先として一般企業も受けていましたが、やはり諦めきれず再びアナウンサー試験を受け始め、最終的に宮崎放送に就職が決まりました。

—アナウンサー時代はどのようなお仕事をされていましたか？
小島君　2011年に宮崎放送に入社して、主に朝10時台の情報番組のアシスタントを担当していました。希望だった実況のアナウンスも、高校野球や少年サッカーでやらせてもらえました。特に高校野球では地元の大会の１回戦などを担当しましたが、選手の家族の方々が記念に録画してとっておいたりすることもあるので、かなりプレッシャーがありました。試合の状況によっては事前に準備していたものを全部使えるわけではないですし、選手たちからすれば一試合一試合が大切ですから、責任重大だと思っていました。なるべく一人ひとりの名前を呼んで盛り上げられるよう、緊張感を持って臨んでいました。新人で、男性アナウンサーということもあり体当たり取材なんかも多かったです。1カ月前に突然言われて、フルマラソンに出たこともあります。まずは靴を買いに行きましたね……。番組の企画ということもあって、途中でリタイヤするというのは格好がつかないので、必死でした。結果的には５時間55分で完走できました。

—印象に残っている仕事はありますか？
小島君　特に嬉しかったのは、2013年に高校サッカーで地元宮崎の高校が全国大会で優勝した時です。県大会の決勝でベンチリポートを担当していたのと、その時の優勝インタビューをしたこともあって思い出に残っています。全国大会で優勝というのは宮崎県で初めてのことだったので、選手たちが帰って来てからも大変なお祝いムードで、特番も組まれていました。思い入れがあってすごく誇らしかったです。

—そんな充実したアナウンサー生活を過ごしていたのに、なぜ医師を志したのですか？
小島君　理由としては母の病が大きかったですね。もともとアナウンサーになる前から、ガンを患っていたのですが、一応それは完治して。ただ、宮崎に行っている間に別のところにまたガンができてしまったんです。家族として看病したいと思いましたが、遠距離だとすぐには帰れないので。地元に戻って母を支えようと思ったのが大きかったです。それと同時に、アナウンサーの同期でお父さんが開業医という人がいて、そういう道もあるなと思ったのもきっかけでした。医大を受験するために勉強を始めて１年くらい経った頃、母は亡くなりました。それもあって、絶対医者になろうという気持ちが固まりました。

—受験勉強は順調でしたか？
小島君　正直、勉強は大変でした。ゼロからのスタートでしたし、一度社会人経験があるので、変にプライドもあって周囲の意見を素直に受け入れられなくて。プライドなんて捨ててしまえ！となるのに随分時間がかかってしまいました。母が亡くなったこともありメンタル的にはかなり厳しかったです。
　マリアンナに受かった時は、自分より家族の方が驚いていましたね。本当に受かるんだ、と。結局仕事を辞めてから時間はかかってしまいましたが、入学が決まった時は本当に嬉しかったです。

フルマラソン　完走

スカッシュ同好会のメンバーと

—本学に入ってみて初めの印象はどうでしたか？
小島君　周りのレベルが高いですよね。名前だけ聞いたことはあるけど、受けようと思ったことがないくらいの高校出身の人ばかりで。高校の名前もそうですが実際に勉強ができる人たちが多くて初めは少し気後れしました。話してしまえば普通の男の子、女の子なんですけど。
社会人経験がある人もいますので、年齢的な垣根とかは特に感じませんでした。そういった再受験生には馴染みやすい環境だと思います。

—部活などはされていますか？
小島君　スカッシュ同好会に入っています。（以前医大新聞でも取材をした）林美音さんが作った同好会で、自分は３代目の部長を務めています。大体、一緒にいるのはスカッシュ同好会のメンバーですね。東医体が今年から本格的に再開されて、スカッシュは種目としてはないんですけど、同期には部活の幹部として最後の東医体に参加してる人もいますね。みんな力を入れて頑張っています。

—他に力を入れていることがあれば教えてください。
小島君　研究に興味があり、臨床腫瘍学の医局へも行かせていただいてます。医学生はあまり研究はやらないと思いますが、以前、大学院に行っていたのもあり、研究をやりたいなと思って。早期体験実習のキャリアインタビューで臨床腫瘍学の砂川先生にお話を伺って、その時に「研究に興味があるんです」とお話をさせていただいたことがきっかけで去年の２月くらいから砂川先生のもとでアンケート研究を行っています。現在は患者さんにアンケートを取り終わって解析しているところです。母の病気のこともあって、今はがんに関する研究をしています。砂川先生は、マリアンナでがん治療を地域に提供したいというところにこだわって頑張ってらっしゃるので、その目標の高さというか、意識の高さを尊敬しています。

—将来どんな医師になりたいですか？
小島君　患者さんやご家族に納得してもらえるような医療を提供する医師になりたいですね。母が亡くなった時、納得がいかなくて理由が知りたくて。そうしたら、先生が血液を調べてくれて、一つの原因が分かったんです。もちろん、なぜ？という気持ちが消えたわけではなかったですけど、納得はできました。そのおかげで家族の気持ちが先へ進める一歩になったと思います。
医療は完全ではないので難しい部分もあるとは思いますが、納得してもらえるようにより一層コミュニケーション能力や説明能力が必要なのかなというふうには思いますね。患者さんはもちろんですが、ご家族も救えるよう、尽力したいと思います。

—最後に今後の目標などあれば教えてください。
小島君　アナウンサーと医師って共通点があるの？と思われる方もいらっしゃると思いますが、私自身、スポーツ実況に救われて、アナウンスを通して人を救うということや元気づけることをやりたかったというのがあったので、人を助けるという意味では手段が変わっただけだと考えています。
　“自分の存在価値はなんだろう”というのはよく考えていて、医師になって社会に貢献するということもですが、医療に関する情報を患者さんに発信していくという面では、これまでの経験が生きると思いますし、一つのストロングポイントとして使えると思っています。それらを含めて『納得してもらえる医療』を提供できるよう精進していきたいです。

解剖ご遺体 追悼ミサ

　去る10月５日（木）、本学にて「解剖ご遺体追悼ミサ」を、川崎大師平間寺にて「解剖ご遺体慰霊法要」をそれぞれ執り行いました。
　過去３年間はご遺族をお招きすることができませんでしたが、今年度はご遺族にもご参列を賜り、本学関係者並びに医学部生及び看護学生とともに、医学教育並びに医学の発展のために尊いご遺体を捧げて下さった諸霊を偲びました。
　本学の教職員及び学生一同、諸霊のご厚志に深く感謝し、改めてご冥福をお祈り申し上げます。

学内追悼ミサ

　明石勝也理事長はじめ法人理事らが、10月４日（水）本学創立者明石嘉聞先生の墓前で手を合わせました。また、同日午後からは嘉聞先生並びに本学の発展に尽力された教職員方を偲び、「創立者故・ステファノ明石嘉聞博士と亡くなられたすべての教職員学内追悼ミサ」が挙行されました。

第66回 東日本医科学生　総合体育大会（夏季）

本学学生の活躍について

第66回東日本医科学生総合体育大会（夏季）が令和５年８月１日(火)～16日(水)の約２週間の期間で開催され、順天堂大学、群馬大学、日本大学、埼玉医科大学の４主管校により運営されました。

本学の主な結果は、団体競技では剣道部が男女ともにベスト８、ゴルフ部は女子団体３位入賞、水泳部が女子４×50m メドレーリレー３位入賞、バスケ部女子がベスト８などといった好成績を収めました。

個人競技ではゴルフ部男子が２位入賞、水泳部男子が50m背泳ぎで３位入賞、陸上部では男子が三段跳１位入賞、女子が円盤投げ１位といった素晴らしい功績を残し、夏季大会は無事終了しました。

また、冬季大会では、アイスホッケー部･スキー部の活躍が期待されます。最後に、日頃より学生をご支援ご指導して下さっている保護者の方々並びに教職員の皆様に、厚く御礼申し上げます。

教学部 学務課　大里　満

剣道部

剣道部は、部員が少ないながらも稽古を行い、技術・心身の向上に努めています。東医体では、団体戦は男女ともにベスト８の結果となりました。その他にも、医歯薬獣大会、医療系大会、女子剣道大会、市民大会などに出場しており、医歯薬獣大会や市民大会では個人で優勝を果たした部員もいます。

普段の稽古では、大学から剣道を始めた部員に対して経験者が指導することはもちろん、経験者同士でも互いに指導し合い、部員全員で日々研鑽を重ねています。胴着、袴、防具を身につけたハードな練習の中でも、休憩時間は先輩後輩関係なくおしゃべりが続く仲の良い部活です。休憩時間でも先輩にアドバイスをもらいにいく様子も多くあり、部活以外に自主練などをする剣道好き部員の集まりです。また、顧問の先生やOB・OGの方が稽古にいらして指導していただくこともあり、大変お世話になっております。このように縦の繋がりも強く、剣道部は家族のような関係性です。

硬式野球部

硬式野球部です。昨年の秋からプレーヤー10名、マネージャー９名、そして春から新入生のプレーヤー４名、マネージャー２名を加え、１部リーグ残留、東医体優勝を目標に真剣にかつ楽しく活動してきました。

春リーグでは最初の２試合を落としてしまったものの、試合を重ねながら成長することができ、結果３勝２敗１分けと春１部リーグ３位の結果を納めることができました。しかし４年ぶりとなった東医体では信州大学に敗れ初戦敗退、一方信州大学はそのまま勝ち進み優勝するという悔いの残る大会となってしまいました。また残念なことにこの大会をもってプレーヤー１名、マネージャー１名が引退となりました。秋から新チームとなりますが、打倒信州大学を掲げて１部リーグ・東医体優勝を目標に頑張っていきます。

空手道部

押忍、失礼いたします。空手道部について紹介させていただきます。空手道部は毎週火・木曜日に第３アリーナにて活動しています。部員は６年生３名、５年生１名、４年生１名、３年生１名、２年生３名、１年生３名の計12名です。流派は昭霊流です。

2023年８月に、空手道部は４年ぶりに東医体に出場いたしました。思うような結果を残すことはできませんでしたが、学ぶことの多い良い大会であったと思います。東医体に向けてご指導くださいました先生方に、心より感謝申し上げます。

マリアンナの空手道部の良さとして、OB・OGの先生方との繋がりが強いことが挙げられると思います。先生方には日頃より温かいご指導及びご支援いただいております。マリアンナの空手道部員であることを誇りに思い、先生方への感謝の気持ちを忘れずに引き続き精進してまいりたいと思います。

硬式テニス部

硬式テニス部では、主に男子部は週３日、女子部は週２日の練習に励んでいます。初心者から経験者まで様々なレベルの部員が所属しており、日々楽しみながら切磋琢磨することで個々のスキルアップ、またチーム力の向上を目指して活動しています。コロナ禍の影響でここ数年は大会出場ができませんでしたが、今年度から東医体に参加することができましたので、結果を残せるよう意識を高く持ち、練習メニューに取り組んでまいりました。

今年度の東医体では最善を尽くしたものの敗退してしまいましたが、負けという結果によってまた明確な目標が定まり、部としても引き締まりました。

また、部活動を行う上で最も大事なことはチームワークであると考えています。練習の中で自分のことだけではなく、お互いのプレーに対してアドバイスをすることでチームメイトとして交流を深めています。普段はふざけ合い笑い合い、練習は真面目に取り組む。このようなメリハリを持つことができているからこそ団結力が強まり、少しずつではありますがチームとして成長していると思います。

ゴルフ部

私たちゴルフ部は東医体において男子個人２位入賞、女子個人２位入賞、女子団体３位入賞という成績を収めました。コロナ禍があけてから週２回の練習場での練習、月１回のラウンド、合宿などで50名を超える部員が切磋琢磨し体力面、精神面ともに成長した結果がこの成績に現れたと思います。ゴルフ部では初心者も多く、先輩が後輩に教えるという形で部活を行っております。細かいルールやマナーの多いこの競技ですが縦のつながりを生かし、ゴルフを１～100まで学びラウンド経験を重ねていきます。今回の夏の東医体を経験し、まだまだ上を目指せるということがわかりました。部全体として更なる技術向上に努めて行きたいと考えております。

第 66 回 東日本医科学生　総合体育大会（夏季）

バレーボール部

現在、バレーボール部は男子部プレイヤー 14 名・マネージャー４名、女子部プレイヤー 25 名・マネージャー８名、計 51 名で活動しています。学年を超えて男女共に仲が良く、賑やかな部活です。

私が入部した時はコロナ禍で、練習が不定期に行われ、大会自体中止されていました。しかし、多くの方々のご協力のもと、昨年秋から本格的に活動を再開することができました。

８月１日（火）～４日（金）に行われた東医体は、１～４年生にとっては初めての大会でした。先輩方から聞いていた東医体のイメージ通り、多くの学校が集い、闘いながら親交を深める様子が印象的でした。結果は男女とも予選敗退となりましたが、東医体を経験できたことは部員全員にとって非常に意味のあることだと感じました。来年の東医体は、男女とも決勝トーナメントに進めるよう、より一層精進して参ります。

最後になりましたが、OB・OG の先生方をはじめ保護者の皆様方など、数多くの方々より多大なご厚意をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。

ソフトテニス部

2023 年８月４日（金）～８日（火）、軽井沢にてソフトテニス部の東医体が行われました。１年生から４年生は初の東医体、１年生に関しては初の公式戦でしたが、みんな今までの練習の成果が発揮でき、無事に東医体を終えることができてよかったです。また、OB・OG の先輩方が応援に駆けつけてくださり、歴代の OB・OG の先輩方が経験してきた東医体の雰囲気を実際に私たち現役生も経験することができて有意義な時間でした。ソフトテニスに関しても、部員みんな徐々に上達していき、試合に勝てる部員が増えてきました。団体戦は負けてしまいましたが、個人戦は２回戦まで進出したペアもあり、今後の結果に期待できます。来年の東医体の団体戦では上位リーグに出場できることを目標にこれからも練習を頑張っていきたいです。

準硬式野球部

準硬式野球部は、部員 45 人の部活です。練習は週３（火･木･金）で、場所はフコク生命グラウンドもしくはマリアンナグラウンドで行っています。試合は春リーグ、東医体、秋リーグがあり、それらに向けて練習しています。

準硬式野球部の特徴として、２つ挙げられます。１つ目は野球をやったことがない人が多いということです。大学から野球を始めるのは勇気がいることですが、準硬式野球部は大歓迎です。基礎から部員みんなで練習しています。

２つ目は先輩と後輩、プレイヤーとマネージャーの仲がとてもいいということです。練習での交流だけでなく、BBQ やスノーボード旅行などレクにも力をいれ、楽しい部活を心掛けています。

準硬式野球部は、運動したい人、野球が好きな人、いい先輩に巡り合いたい人、楽しい大学生活を送りたい人におすすめの部活です。

水泳部

８月８日（火）、９日（水）に長野県で開催された東医体に、水泳部は 30 名程が出場した。我が校の参加は、実に４年ぶりである。

結果は女子総合３位、個人種目・リレー種目合わせて 14 個の入賞を果たし、大健闘であった。

一般抽選のある公共プールでの練習を行っているため、定期的な部活動が出来ていない状況の中、多くの部員が自身のベスト記録を更新した。応援にも力が入り、他大学に引けを取らない声援が飛び交った。また６年生にとっては最後の試合であり、閉会式後の卒業セレモニーでは会場全体が感動に包まれた。

この２日間、全力で泳ぎ、全力で応援し、全力で喜ぶことができた大会だった。目標を達成した部員も、悔しさを残した部員も、貴重な経験をすることが出来たことには違いないだろう。大きなプールを埋め尽くすほどの熱量が、東医体が終わった今も心に残っている。この気持ちを忘れることなく、また一年後の東医体に向けてこれからも練習に励んでいきたい。

卓球部

卓球部主将、３年の二神です。

今回は、医大新聞の場をお借りして、卓球部のことについて紹介させていただきます。

現在、卓球部は、月曜と金曜の週２で活動しています。我々が普段活動している第２アリーナは、専用卓球場となっており、もっと卓球したい方は、自主練することが可能になっています。また、卓球部の特徴としましては、練習する時は集中してやる。遊ぶときは遊ぶといったメリハリをつける所です。そのため、勉強や遊びにバイト、兼部しながらでも両立できている部員はかなり多いです。

このように、卓球部は環境や雰囲気に恵まれているため、大学はじめの方でも卓球に対するモチベーションは高く、大会でも良い成績を残しています。今年度の卓球部の成績は、医系交流戦でベスト８、令和杯ベスト４、そして４年ぶりに開催された東医体では、個人戦ベスト 32 と優秀な成績をおさめました。

今後もさらに上位を目指していくつもりですので、宜しくお願いいたします。

陸上競技部

私たち陸上競技部は、男子６名、女子 10 名で活動しています。他大学チームと比べて少人数であり、大学から離れた練習環境ではありますが、試合で活躍する選手もいます。他大学の学生と合同練習や試合を通して交流を深めるとともに、競技力向上にも繋げています。これからも少人数ならではの結束力と、他大学との交流を大いに生かし、それぞれの目標に向けて活動していきます。

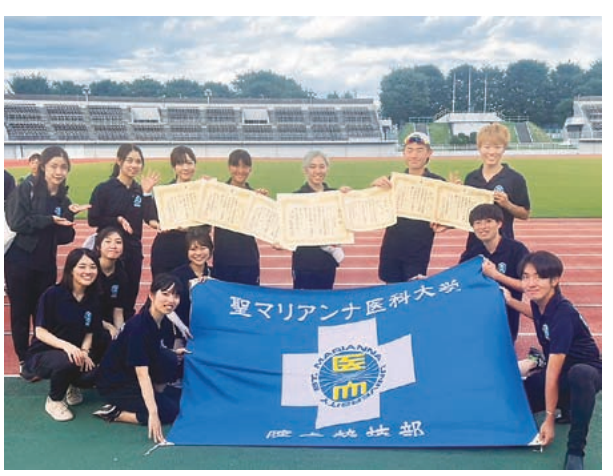
男子

走幅跳	中野瑛心（2）	6m70（+2.2）	５位
三段跳	中野瑛心（2）	13m58（+1.5）	１位

女子

100m	川合千尋（4）	13.38（1.9）	４位
200m	川合千尋（4）	27.57（2.5）	４位
円盤投	岸本果穏（3）	31m10	１位
やり投	岸本果穏（3）	25m24	５位
女子フィールド		12 点	６位

最後に、2023 年８月 10 日（木）～ 11 日（金）に群馬県、正田醤油スタジアムで第 66 回東日本医科学生総合体育大会が４年ぶりに行われました。マネージャーの支えもあり、選手一同全力を尽くしました。入賞結果は以下の通りです。



創立50周年記念事業募金

本学は2021年10月14日に創立50周年を迎え、記念事業として実施している菅生キャンパスリニューアル計画は、2022年11月に入院棟が竣工いたしました。また、2024年末にはエントランス棟及び新外来棟が竣工を控えております。この建物の整備により、大学病院は先進的かつ高次で良質な医療を提供する空間と優れた医学教育環境の場が整い、教育・研究・診療環境が格段に向上いたします。

また、新型コロナウイルス感染症対応においては、医師・看護師を始めとするメディカルスタッフが一丸となって診療に励んできたところであります。

皆様におかれましては、本学の教育・研究・診療活動にご理解いただき、引き続き当法人の活動にご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

募金目的：創立50周年記念事業の1つである
菅生キャンパスリニューアル計画への支援

募集開始からの受入金額：1,177,485,131円（2023.10.31現在）

2022年度下期から2023年度上期（2022年11月1日から2023年10月31日）の寄付金受入状況は214,753,210円／268件となっております。皆様からの多大なるご支援に厚く御礼申し上げますとともに、ここにご芳名を掲載させていただきます。

※お申し込み時に、掲載「不可」又は「意思表示のなかった方」につきましては、芳名は掲載しておりません。
掲載をご希望される場合は、お手数ですがお問合せ先までご連絡くださるようお願い致します。

◆寄付者のご芳名【法人】

医療法人社団伊豆七海会　熱海所記念病院	理事長	横川　秀男
医療法人社団グッドヒルズ　よしおかファミリークリニック	理事長・院長	吉岡　信二
医療法人社団総生会	理事長	菅　泰博
医療法人社団藤井整形外科	院長	藤井　厚司
医療法人社団優麟会　ハートクリニック	理事長	小泉　聡
医療法人新光会（社団）	理事長	櫻井　信行
医療法人黎山会　山口整形外科		山口　哲史
株式会社アニマルケア	代表取締役	前川三千夫
株式会社アペックス・インターナショナル	代表取締役	千嶋　達也
株式会社世田谷自然食品	代表取締役	河西　英治
株式会社ティ・アシスト	代表取締役	堀　弘和
株式会社田商事	代表取締役	鈴木　武龍
株式会社ニチリョー	代表取締役	伊東　義則
株式会社日本シューター		
株式会社三菱UFJ銀行　川崎支店	支店長	村上　雅彦
カミマル株式会社	代表取締役	田邉　幸則
聖医会　静岡支部		
聖医会　千葉支部		
聖医会　東京支部　城東ブロック会		
聖医会　福島県支部		
聖医会　福岡支部		
聖マリアンナ医科大学1期生（1971年入学）の会		
聖マリアンナ医科大学20回生一同		

◆寄付者のご芳名【法人】

聖友インシュアランスアンドリース株式会社	代表取締役	斎藤　裕
高津心音メンタルクリニック		
タケダ株式会社	代表取締役	佐藤　大
タケダシステムズ株式会社	代表取締役	秋山　洋徳
東芝エレベータ株式会社	代表取締役社長	川﨑　幹
戸田建設株式会社横浜支店	支店長	縄田　浩

◆寄付者のご芳名【個人】

明石　嘉浩
秋山　欣丈
麻生　敬
東　伸行
荒井　政光
荒瀬　透
安藤久美子
五十嵐理慧
池田　敏春
石井　由佳
石橋　健一
今井　五郎
岩村　宗通
植村　博之
榎本　武夫
往西　誠
大内　英樹
大谷　行子
大坪　毅人
大野　秀子
大橋麻衣子
大林　直樹
岡﨑　貴裕
小田　武彦
小柳　正子
柿崎　圭介
金子　敏雄
河北　幸夫
川瀬　弘一
岸　忠宏
岸本　幹史
北岡　康史
北川　博昭
清川　博史
楠本　昌彦
國島　広之
國田　大輔
久保田久美子
久保田泰隆
久保寺宗成
倉澤　恒雄
黒瀬　紀子
小海　信一
紅露　剛史
小森　学
齋藤　法夫
齊藤　道也
酒井　正之
佐久間　惇
佐藤　圭司
佐藤　有子
柴本　昌昭
清水富士雄
東海林洋子
白石　京子
白石　眞
白鳥　徹
末光　一三
杉田　隆
鈴木　桂子
鈴木　直文
鈴木　博
添田　和俊
園田　桜子
髙木　芳子
高桑　弘道
高田　光敏
髙橋　英二
髙橋　正樹
高間　元久
滝澤　將人
武井　圭子
武久　裕信
田中　逸
田邉　收
知念　貴子
長　秀男
辻　祐一郎
津田　義久
恒川　英之
角田　俊也
徳丸　忠昭
徳山三枝子
徳山　道子
土至田　宏
中尾　智彦
仲澤　眞人
中島　宣幸
中田　雅弘
中村　豊
名古屋和壱
名城　文雄
新倉謙太郎
西迫　良
西俣　雅彦
西村二三男
根岸　賢一
根本真一郎
野坂　俊介
橋本　卓雄
長谷川 大輔・長谷川 智里
長谷川聖治
畑地健一郎
早川 広史・早川 さゆり（伊勢 さゆり）
林　龍男
林　芳子
原　正壽
原田　智雄
平野　敏政
平野　大
福永　敬子
福本　真也
藤田　克寿
伏見　浩一
藤本　治彦
舟久保ゆう
古川　尚志
星野　章浩
堀越　健
増田都志彦
松本　光生
民上　真也
三島　彰
水野　幸一
三好　由美
望月　輝暁
森澤　幸子
門司　明夫
八ケ代万智子
山口　静子
山口　時彦
山村　基吉
横山　勝征
吉永　陽子
米島　正博
渡辺　明人
渡部　秀憲

（順不同、敬称略）

教育研究支援募金

2022年度下期から2023年度上期（2022年11月1日から2023年10月31日）の寄付金受入状況は16,779,999円／56件となっております。皆様からの多大なるご支援に厚く御礼申し上げますとともに、ここにご芳名を掲載させていただきます。

※お申し込み時に、掲載「不可」又は「意思表示のなかった方」につきましては、芳名は掲載しておりません。
掲載をご希望される場合は、お手数ですがお問合せ先までご連絡くださるようお願い致します。

募金目的：教育研究活動への支援を目的とした募金

◆寄付者のご芳名【法人】

医療法人うえはらクリニック	理事長	上原　俊樹
医療法人社団理桜会	理事長	櫻井　丈
社会医療法人社団 堀ノ内病院	理事長	小島　徹
ながつた緑の皮フ科・形成外科	院長	菅谷　文人
目白ひとみクリニック	院長	大西　礼子

◆寄付者のご芳名【個人】

英保　裕和
石亀　勝
石田　史彦
今井　健
笠井　謙和
金子　誠一
上木原賢一
川内　治
國島　智子
小池　規昌
小泉　聡
小島　輝久
小塚　順子
酒井　翼
新藤　克之
隅野　俊亮
高島　英忠
竹本　正明
露木　良治
土至田　宏
冨塚　直樹
根本真一郎
福田　理加
藤田　泰之
保澤総一郎
松山　年男
水上　佳樹
山下　靖子
吉田　明博

（順不同、敬称略）

新型コロナウイルス対応支援寄付金（充実発展資金）

2022年度下期から2023年度上期（2022年11月1日から2023年10月31日）までの寄付金受入状況は580,000円／19件となっております。皆様からの多大なるご支援に厚く御礼申し上げますとともに、ここにご芳名を掲載させていただきます。

なお、新型コロナウイルス感染症対応支援寄付金においては、これまで多くの方々よりご支援をいただいておりましたが、2023年5月8日に5類感染症へ変更になったことに伴い、本支援金の募集を終了させていただきました。ここに皆様からの温かいご支援に感謝申し上げます。

※お申し込み時に、掲載「不可」又は「意思表示のなかった方」につきましては、芳名は掲載しておりません。
掲載をご希望される場合は、お手数ですがお問合せ先までご連絡くださるようお願い致します。

募金目的：新型コロナウイルス感染症の予防、診断、治療に
係る各種備品類の購入や施設整備等の実施

◆寄付者のご芳名【個人】

天岡　幸
大谷　洋
小黒　清貴
加藤　昌之
土至田　宏
松　本
望月　浩司

（順不同、敬称略）

勤務犬モリスの引退式

勤務犬モリスは、2019 年 1 月に 2 代目勤務犬に認定されて以降、4 年にわたって愛くるしい様子と甘えん坊の性格を生かし、患者さまに病気と闘う勇気と、入院中とは思えない優しい空間を提供し、医療スタッフにもコロナを乗り越える勇気を与え続けました。そのモリスも任期を終えて、2023 年 5 月 29 日に最終活動日を迎えました。5 月 23 日にはモリスのことが大好きな 200 名を超える患者さまや職員の方々の笑顔に囲まれ、モリスの引退式が行われました。会場となった病院大講堂には、入院中にもかかわらず一生懸命に車椅子をこいでいらした患者さまや、点滴棒に寄りかかりながらモリスに会いにきた患者さまの姿がありました。退院して見違えるように元気になった患者さまの姿も多くありました。全ての患者さまが、それぞれのつらいとき、苦しいときにモリスを抱きしめ、モリスに寄り添いながら、ハンドラーと一緒の時間を共有し、それぞれの困難を乗り越えてきました。モリスはそんな患者さまのひとりひとりを覚えていて、尻尾をブンっと振りながら歩み寄り、いつものように撫でてと甘えておりました。引退式は北川学長、大坪病院長、日本介助犬協会の高柳先生から謝辞をいただき、勤務犬委員会からモリスの活動を報告した後、ハンドラーの大泉さんと竹田さんからモリスを支えて下さった多くの患者さまや職員の方々への感謝の言葉が述べられました。次に、モリスとハンドラーに感謝状とアルバムが贈呈され、日本介助犬協会からも贈呈品が送られました。最後に、第 3 代目勤務犬ハクとハンドラーの兒島さんと溝部さんの認定式が行われました。この引退式の様子は 6 月 26 日の朝日新聞夕刊の 1 面に「病院勤務犬 寄り添い続けた 4 年」のタイトルでご紹介いただきました。ぜひ今後も当院が全国に誇ることができる活動の一環として、勤務犬の活動にご理解とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

追伸：引退式の準備・運営に医学部の勤務犬学生部の皆様の多大なるご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

小児科　講師　長江千愛

附属病院　施設だより

❖東横病院❖

閉院にあたり

「愛ある医療を聖マリアンナ医科大学発祥の地、武蔵小杉から」当院のホームページトップのキャッチコピーである。ホームページリニューアルの際に当院を印象付けるファーストビューに何を込めるかを検討した際に、古畑病院長が当院のキャッチコピーはこれしかない！とおっしゃった。「発祥の地」と掲げることについて明石理事長の許可を頂いてホームページが公開できた時は、感慨もひとしおだった。

また、コロナ禍の 2021 年 7 月に新型コロナウィルス感染拡大と闘う医療従事者のための祈りの集いを開催し、その後 1 年に 1 回、恒例のイベントとして小田神父様による祈りの集いが開催されている。特に今年の祈りの集いでは、小田神父様よりシスターマリアンナと法人名「聖マリアンナ」の由来のお話があり感慨深い会となった。参加者からは法人、創立者の思いの詰まった病院で働くことができることに感謝しますというコメントが届いた。

診療面においては、「東横病院で生まれた」、「親子 3 代お世話になっている」、「次の入院もよろしくお願いします」など通院歴の長い患者さんが多い。

当院はコンパクトで数分あれば縦横移動が可能である。管理棟 4 階には看護部、医療安全・感染管理室、総務課、院長室が配置されているので、用事は「カニ歩き」と看護部の近藤参与がよくおしゃっている。3 階に医局、副院長室が配置されていることもあり、本当に用事が早く済む。ひとつの物事を進めるのも早い。4 月以降は法人内の異動先で仲間を探すことになるだろう。東横病院での経験を活かして次のステージに進むのみである。

総務課 主幹　阿部征子

❖西部病院❖

横浜市西部地域連携セミナー開催

2023 年度より「地域医療のニーズに応えて地域に貢献」するための新たな取り組みとして横浜市西部地域連携セミナーを開催致しました。

第 1 回は横浜市旭区医師会を対象として 4 月 26 日に相鉄線の天王町駅前にあるモンテファーレにおいて行い、他施設を含む 79 名の先生・病院や医院の職員の方々に出席頂きました。第一部としてやまぐち呼吸器内科・皮膚科クリニック院長の山口裕札先生に司会を賜り、呼吸器内科部長の井上健男先生が「ガイドラインに基づいた咳嗽の治療」と題した講演を行い、第二部で地域の先生方との意見交換会を行いました。

第 2 回は横浜市瀬谷区医師会を招いて 6 月 21 日に西部病院講堂で行いました。第一部では高畑耳鼻咽喉科医院理事長の高畑喜延先生の司会で、耳鼻咽喉・頭頚部外科部長・めまいセンター長の瀬尾徹先生による「めまいセンターの紹介」を講演致しました。第二部での意見交換会も盛大に行い、62 名の方々に参加頂きました。

いずれのセミナーにおいても病院長、副院長、各診療科部長をはじめ医員の先生方も参加され、様々な意見交換が行われて「顔の見える医療連携」を築くことができました。その後、8 月 30 日に泉区医師会館、11 月 28 日に大和市地域医療センターにおいて、各医師会ご協力のもと同セミナーを開催いたしました。地域連携をさらに強化することによって「選ばれる病院」を目指して取り組んで参ります。

副院長／
消化器・一般外科学 准教授
内藤正規

❖多摩病院❖

春の看護の日イベントの開催について

去る 5 月 19 日（金）に多摩病院正面玄関前で「看護の日イベント」を開催いたしました。

これまで、コロナ禍で開催を見送ってきましたが、コロナが 2 類から 5 類へ引き下げが行われたこともあり、4 年ぶりに開催することを決定いたしました。当日のイベントへは、延べ 150 名の市民の方々が参加されました。コロナ前の参加人数よりも 2 割程度は減少しておりましたが、待ち時間も少なく、スムーズに運営することができました。

当日のイベントは、健康測定として、骨密度・体脂肪測定や血圧測定を、体験コーナーでは AED の操作、そのほか栄養相談やリーフレットの配布などが行われ、地域の方々と直接顔を突き合わせ、会話を通して、改めて市民の方々の健康への関心の高さを窺わせる機会となりました。

参加された方々からは「ありがとう」「またやってね」とのお言葉をいただき、貴重な交流の場となったことを受け、地域の方々との交流を深め、医療、看護への理解と更なる健康への関心を高める機会としていただくため、秋に改めて開催する予定としております。

事務部 参与　桑折正美

❖ブレスト＆イメージング先端医療センター附属クリニック❖

ピンクリボン スイーツ ミニウオークを開催しました

コロナ禍にて人の動きが止まっていた 3 年間、モニターと向き合ってきた日々からやっと小さな光が見えてきました。この時を大切に！動き出そう！この掛け声を勢いに、「ピンクリボン スイーツ ミニウオーク」を企画いたしました。

梅雨の晴れ間の土曜の午後、熱中症を心配しながら、ラムネを楽しみ、飾った風船を追っかけ、日常の楽しい会話が受付会場に戻ってきました。「新百合ヶ丘のスイーツから元気をもらおう！」「コロナ禍、辛かった日々をスイーツで笑顔になろう！」こんな挨拶からブレスト＆イメージングセンター 1 階駐車場をスタートしました。お子さんの可愛いいはしゃぎ声と、ピンクの装いの楽しい会話が弾みながら新百合ヶ丘近郊のスイーツのお店を目指して約 1 時間半のミニウオークが始まりました。

このウオークの目標は、楽しみながら「乳がん」について身近に感じていただき、乳がん検診に向けて足を運ぶきっかけ作りにあります。スイーツを食べながらピンクリボンクイズにチャレンジ、そして乳がんと闘う多くの皆さんへ応援メッセージをお願いするという時間をつくりました。現地参加者だけでなく WEB からも参加メッセージを募りました。

このピンクリボンレポートの詳細は、スマイル マンマ マリアンナのホームページへ掲載予定です。

最後にもう一つ、参加賞として準備をした農家さんの取れ立て野菜、多くの方から「美味しかった」とご連絡をいただき、沢山の笑顔が繋がりました。これからも皆さんの生活の中に多くの笑顔が届く活動を続けていきます。

臨床放射線技師　小泉美都枝

聖マリアンナ医大新聞編集委員会 委員名簿　（2023 年 4 月 1 日現在）

●委員長　藤谷博人［スポーツ医学 主任教授］
●委　員　舩橋利也［生理学 主任教授］／竹村　弘［微生物学 主任教授］／大平善之［総合診療内科学 主任教授］／丸井祐二［腎泌尿器外科学 教授］／安藤久美子［神経精神科学 准教授］／鈴木昌子［看護専門学校 校長］／中村孝史［総務部 部長］／鈴木安鶴子［大学院・研究推進課 課長］／阿部征子［東横病院総務課 主幹］／前田光一郎［西部病院事務部 部長］／桑折正美［多摩病院事務部 参与］／清水朋子［栄養部 部長］／中澤真希子［看護部 師長］／奥島英明［総務部 参事］／平高菜海子［総務部総務課］

選ばれる病院　～人・社会・未来から～

学校法人聖マリアンナ医科大学

創立50周年記念事業

1971年に川崎市に創立されました本学は、2021年に創立50周年を迎えました。今日まで多くのご支援とご協力を賜りましたすべての方々に心から御礼を申し上げます。

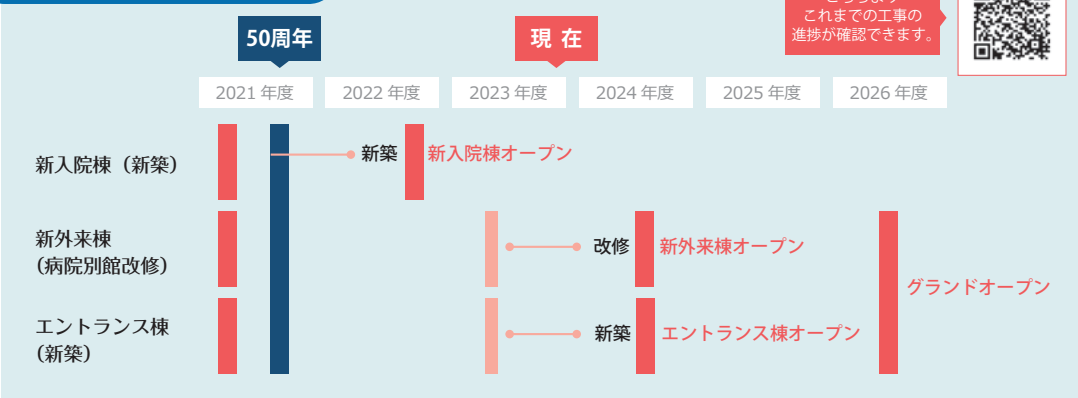
本学では、創立50周年にあたり菅生キャンパスリニューアル計画を策定し、このたびその中核となる大学病院（新入院棟）が竣工致しました。大学病院は、診療、教育、研究を行う重要な施設であり、50年ぶりの建て替えには本学の将来にわたる命運がかかっているといっても過言ではありません。中心に据えたコンセプトは地域に求められる大学病院の果たすべき役割であります。贅を尽くした華美さはありませんが、明るく、広々とした環境の中で最高レベルの医療を提供させていただきます。

菅生キャンパスリニューアル計画は、今後もエントランス棟の建築、病院別館の改修、病院本館の解体、新ロータリーの整備と続きます。皆様方におかれては、是非とも本事業の趣旨にご賛同いただき、更なるご支援を賜りますようお願い申し上げます。

リニューアルスケジュール

※下記スケジュールは2024年1月現在のスケジュールです。

こちらより
これまでの工事の
進捗が確認できます。



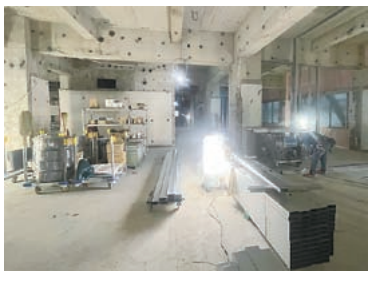
◇新外来棟工事 進捗状況

③ 新外来棟2F：EVホール

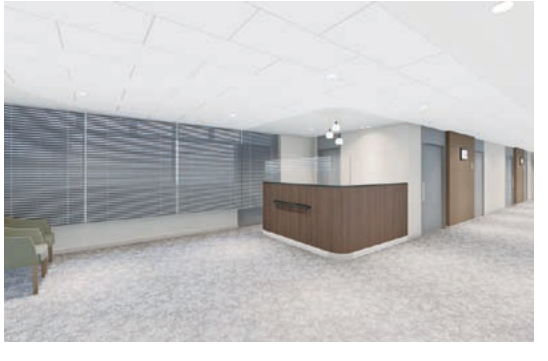
① 新外来棟1F：総合受付

④ 新外来棟5F：産科　待合

② 新外来棟1F：小児　待合



⑤ 新外来棟7F：特診受付



募金のお願い

募　金　概　要

募金目的	菅生キャンパスリニューアル計画　大学病院建替資金
目標額	50億円
募集期間	2018年9月1日～2024年9月30日(約6年間)
募集金額	個人 一口2万円　法人 一口100万円

1. 一口未満のご寄付、複数回でのご寄付につきましても有難くお受け申し上げます。
2. 複数口でのご寄付もご高配賜りますようお願い申し上げます。

お申し込みに際し、ご不明点がございましたら
財務部寄付募集推進室までお問い合せください。

詳しくは申し込みサイトを
ご覧ください。

募金のお申し込み

▶インターネットでのお手続き（お申し込み及び各種決済）

学校法人 聖マリアンナ医科大学 Webサイトから、ご寄付のお申し込みができますのでご利用ください。

決済方法をお選びいただけます >>>>>>

クレジットカード決済　ATM（ペイジー）決済　コンビニ決済　インターネットバンキング（ペイジー）決済

▶受配者指定寄付金制度をご利用の場合のお手続き

法人の皆さまは、日本私立学校振興・共済事業団を通じた「受配者指定寄付金」制度をご利用いただけます。

専用申込書等一式　>>>>

「創立50周年記念事業募金 Webページ」からダウンロードできます。

税の優遇措置

税額控除　年間所得税額の25％を限度として、その年の寄付金の合計額から2千円を差引いた金額の40％が所得税額から控除されます。

所得控除　年間総所得額の40％を限度として、その年の寄付金の合計額から2千円を差引いた金額が、その年の所得から控除されます。

－住民税の寄付金控除－

聖マリアンナ医科大学を「寄付金税額控除対象法人」として条例で指定している自治体（「神奈川県」、「横浜市」及び「川崎市」）では、所得税の確定申告をすることにより、個人住民税の寄付金税額控除を受けることができます。
詳細は各地方自治体Webサイトをご参照ください。

個人情報の取り扱いについて

募金にご協力いただきました皆さまの個人情報につきましては、創立50周年記念事業に関する業務のみに使用いたします。ご記入いただきました内容につきましては、「聖マリアンナ医科大学個人情報保護方針および同規程」に則り適正に管理・保管を行います。

お問い合せ先

聖マリアンナ医科大学 財務部 寄付募集推進室　〒216-8511 神奈川県川崎市宮前区菅生2-16-1
TEL：044-977-8111（代）内：5854，5856　E-mail：bokin50@marianna-u.ac.jp
URL：http://www.marianna-u.ac.jp/contribution/50th/